

主 題：聖書が教える死後の世界
聖書箇所：ルカの福音書 16章19-31節

今日は久しぶりに皆さんとごいっしょにここで礼拝をささげられる恵みをうれしく思っています。このような機会を与えてくださった神と、近藤先生を始め、浜寺の皆さんに感謝しています。今日与えられた聖書のみことばをごいっしょに学んでいきましょう。

まず、皆さんにお尋ねしますが、「終活」ということばをご存じでしょうか？少し前までは「しゅうかつ」というと就職活動のことを指していたのですが、最近は別の意味でも使われるようになっていて、人生の終わりの活動ということで「終活」と呼ぶことがあるようです。実は、私も最近その「終活」に関する報道を目にすることがありました。ある方たちは生前に自分の葬儀に関する希望を伝えたり、自分の遺骨が納められるであろうお墓を生前から決めておいたり、また、ある方たちは自分の遺体が納められる柩の中に入って、そこで記念撮影をしていました。失礼ながら、私の目にはそれは滑稽に映ってしまいました。確かに、私たち人間は今ここで生かされていますが、いつか必ずこの地上での生涯を終える日がやって来ます。それはここにおられる若い皆さんも、また、健康に自信がある方も同様です。でも、そのために必要なことは、私たちが柩に入って記念撮影をしたり、あるいは、生命保険に入ったこと以上に、すべてをご存じの神が私たち人間にどのようなことを教えてくれているか、神が私たち人間に与えてくださった聖書のみことばが、私たちがどのように生きるのかを勧めているのか、そのことに耳を傾けていくことではないでしょうか？

今日、私たちが学んでいく聖書のみことばはルカの福音書16章19-31節の部分です。そこでイエスは私たち人間の死後に関することについて教えてくれています。果たして、みことばが教えている「死後の世界」とはどのようなものなのでしょう？そして、私たちはそれに対してどのように備えていくべきでしょうか？願わくは、今日、このメッセージを聞いてくださった皆さんが、聖書的な死後の世界に関する正しい理解を持ってくださるとともに、真の神が与えようとしてくださっているその救いをご自分のものとしてくださいますように、また、私たちが神から与えられた一日一日を正しく歩んでいくことができるようになってくださることを願います。

命題：聖書が教えてくれている「死後の世界」とは？

I. これは現実の話である 19-23節

まず、今日のみことばの冒頭部分である19-23節を読みましょう。

「19 ある金持ちがいた。いつも紫の衣や細布を着て、毎日ぜいたくに遊び暮らしていた。

:20 ところが、その門前にラザロという全身おできの貧しい人が寝ていて、

:21 金持ちの食卓から落ちる物で腹を満たしたいと思っていた。犬もやって来ては、彼のおできをなめていた。

:22 さて、この貧しい人は死んで、御使いたちによってアブラハムのふところに連れて行かれた。金持ちも死んで葬られた。

:23 その金持ちは、ハデスで苦しみながら目を上げると、アブラハムが、はるかかなたに見えた。しかも、そのふところにラザロが見えた。」

1) これは「たとえ話」ではない

この箇所は非常に分かり易いので、詳しい説明は必要ないと思います。ここに書かれていることは現実の話であることが分かります。つまり、死後の世界というのは、私たち人間が勝手に作り出した空想話や童話の類ではなく、実際に存在する現実の世界、現実の出来事です。間違いなく、みことばは「死後の世界」というものが実際に存在することを教えています。まず、そのことを確認したいと思います。19節の初めに「ある金持ちがいた。」とあり、ここから新しい話が始まっているように見えますが、この箇所を原語であるギリシャ語で見ると、19節には接続詞があって、18節までの話からワンクッション置いた構成になっています。日本語訳の聖書でもここから新しい段落が始まるということを示すために、一文字分下げて書き出されています。

この箇所は実際に起こった本当のことでしょうか？それとも、何かの教訓のために書かれたたとえ話なのでしょうか？明らかなことは、ここにはこれが「たとえ話、架空の話」であるという説明やサインがありません。

(1) 実名が使われている

それどころか、ここには「アブラハム」だけでなく「ラザロ」という実際の名前が出ています。もし、これが「たとえ話」とするならば、金持ちのことは「金持ち」と称しているのに、どうして貧しい人を「ラ

ザロ」と実名を挙げているのでしょうか？

(2) その文脈から

それだけではありません。その前の14節を見るとこの話が語られた文脈を知ることができます。ここでイエスは弟子たちに対して「金銭に注意しなさい、お金に執着してはいけない」と警告されています。しかし、そのことを真近で聞いていたパリサイ人たちはイエスの話をあざ笑うのです。19:14「さて、金の好きなパリサイ人たちが、一部始終を聞いて、イエスをあざ笑っていた。」とあります。この当時、お金持ちは神によって祝福されている、お金持ちは救われている確率が高いのだと考える傾向にありました。ですから、イエスはこの14節以降で、人間の間で崇められているからといって、その人が本当にすばらしい人間である、救われていると思っはならない、また、神のみことばを疎かにしてはならないと言われています。というのも、当時のパリサイ人たちは、神からの称賛よりも人間からの称賛を求める傾向にあったからです。彼らはみことばを人々に教える立場にありながら、実は、自分たちはみことばを正しく理解できていなかったのです。

その後が続いて話されているのが今日見ている箇所です。つまり、この箇所とその直前に話されたみことばには関連があるのです。ですから、イエスが話されたことば「」の部分に注目すると、15節から31節まで続いていることが分かります。つまり、19節からいきなり別の話が始まったのではなく、その前から続いている文脈があるのです。この場面でイエスが言われたかったことは、金持ちだからといって必ずしも全員が救われているわけではないということだったのではないのでしょうか？実際に、ルカ18:24には「イエスは彼を見てこう言われた。「裕福な者が神の国に入ることは、何とむずかしいことでしょう。」と書かれていて、金持ちの方がより救われにくいと言っておられます。

ですから、今日の箇所の文脈は「富に仕える者であってはならない」というイエスの教えに対して、パリサイ人たちがあざ笑ったというその反応の中で、19節からの話が語られているということが分かります。ですから、もし、19節から書かれている金持ちが救われなくて苦しみの場所であるハデスに下ってしまった、金持ちでも救われなことがある、このような例があるという話がたとえ話になってしまうなら、イエスが教えられたことは意味を成さなくなります。

2) 聖書の真実性

実は、今、私がこのようなことを話しているのは、聖書のみことばを重んじる福音派の教会の中でも、この箇所を「これは単なるたとえ話である」と考える教会が少なからずあるからです。でも、私はこれまで話した理由などから、そうではないと考えます。もし、万が一、そうであったとしても、私たち人間が一人残らず神の前に立つときがやって来る、神からさばきを受けるということに関しては変わりはありません。聖書のみことばは多くの箇所でそのことを一貫して教えているからです。たとえば、IIコリント5:10には「なぜなら、私たちはみな、キリストのさばきの座に現れて、善であれ悪であれ、各自その肉体にあってした行為に応じて報いを受けることになるからです。」と警告しています。なぜなら、天の神はすべてのことをご存じだからです。

また、神にはそのようにする根拠、理由、責任があります。というのは、神は皆さんを造り、皆さんに数多くの恵みを与えてくださっているからです。残念ながら、今日のみことばに登場している金持ちはそのことをよく理解できていませんでした。私たちの教会ではこの聖書に記されているみことばを誤りのない神からのメッセージであるという理解をもっています。というのは、何よりも聖書自身がそのことをはっきりと主張しているからです。IIテモテ3:16に「聖書はすべて、神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練とのために有益です。」と教えられている通りです。つまり、聖書の一語一句はすべて神の導きによって書き記されたものです。その証拠に聖書に書かれている数多くの預言などはことごとく成就しています。それが聖書が書かれてから2000年以上、また、3000年も経った今も、聖書は多くの方たちに愛され、読まれ続けている理由でもあります。聖書の中には今日の箇所のような厳しい現実や難しい教えもたくさん書かれています。それらはすべて現実だからです。確かに、聖書の中には簡単に理解できるような身近な話や、子供向けの話も載っていますが、聖書が教えている内容はすべては真の神からのものであり、私たちが知らなければならない真実なのです。

聖書の至るところで教えています。私たち人間は死んでは終わらない、死んだ後もそのたましいは存在し続ける、意識は続いていくと…。ですから、今日見ている金持ちもアブラハムも彼らが生かされていた時と同じ意識、同じ記憶をもって話すことができているのです。死んだからといって、別の人間に生まれ変わるわけではありません。しかも、はっきりと分かることは、すべての人間が同じところに行くわけではないということです。この金持ちも貧しかったラザロも大体同時期に亡くなったように書かれています。彼らは近くに住んでいて同じ時代を過ごしました。また、その名前を知っていることから、彼らには少なくとも何らかの交流があったことが分かります。しかし、彼らが行った先は全く違いました。全く正反対の場所でした。

金持ちが行ったところは「ハデス」と言われる苦しみのある場所であり、ラザロが行ったところは「アブラハムのふところ」と呼ばれる祝福の場所、つまり、天国でした。いったい、どうして彼らの行った先は違ったのでしょうか？もう一度、今日のみことばに目を向けてください。

Ⅱ. 死後、真の神によるさばきがある 24-26節

「:24 彼は叫んで言った。『父アブラハムさま。私をあわれんでください。ラザロが指先を水に浸して私の舌を冷やすように、ラザロをよこしてください。私はこの炎の中で、苦しくてたまりません。』

:25 アブラハムは言った。『子よ。思い出してみなさい。おまえは生きていた間、良い物を受け、ラザロは生きていた間、悪い物を受けていました。しかし、今ここで彼は慰められ、おまえは苦しみもだえているのです。』

:26 そればかりでなく、私たちとおまえたちの間には、大きな淵があります。ここからそちらへ渡ろうとしても、渡れないし、そこからこちらへ越えて来ることもできないのです。』」

ここで一番に確認をしておきたいことは、「この世」と「死後の世界」とは必ずしも単純には繋がっていないということです。つまり、それは今のこの世で祝福された人生を送っていたからといって、死後もすべてのことが満たされて地上にいた時と同じ感覚でおられるわけではないということです。25節に「おまえは生きていた間、良い物を受け、ラザロは生きていた間、悪い物を受けていました。しかし、今ここで彼は慰められ、おまえは苦しみもだえているのです。」と「しかし」とあって、彼らの立場は逆転しています。時々、私たちは勘違いをしてしまいます。自分に都合のいいように考えてしまう傾向があります。自分は今ここで様々なものに満たされている、幸せに生きている、だから、私は神にも愛されていて、死んだ後も神とともに永遠を過ごすことができる、天国に行けるはずだと、それらは私たちの勝手な思い込みで過ぎません。だからこそ、私たちは自分に都合のいい思い込みではなく、きちんとした根拠をもたなければいけないのです。すべてご存じの神のみことばにしっかり耳を傾けなければならないのです。

残念ながら、この金持ちはそのことを真摯な態度で、あるいは、熱心にしませんでした。だから、彼は苦しみのある場所であるハデスへと下ってしまったのです。

2) 私たちを造り…、生かしてくださっている神のみことばとは？

マタイ5:43-48をご覧ください。ここでイエスは天の神はどのような存在で、また、どのようなことを私たちに期待しておられるのかということをお教えています。「:43 『自分の隣人を愛し、自分の敵を憎め』と言われたのを、あなたがたは聞いています。:44 しかし、わたしはあなたがたに言います。自分の敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい。:45 それでこそ、天におられるあなたがたの父の子どもになれるのです。天の父は、悪い人にも良い人にも太陽を上らせ、正しい人にも正しくない人にも雨を降らせてくださるからです。:46 自分を愛してくれる者を愛したからといって、何の報いも受けられないでしょう。取税人でも、同じことをしているではありませんか。:47 また、自分の兄弟にだけあいさつしたからといって、どれだけまさったことをしたのでしょうか。異邦人でも同じことをするではありませんか。:48 だから、あなたがたは、天の父が完全なように、完全でありなさい。』

天の神は良い者にも悪い者にも同じように恵みを施して下さるような愛に富んだお方であると教えています。だから、イエスは弟子たちに対して、あなたがたも人を分け隔てすることなく愛していきなさいと教えられるのです。私たち人間は往々にして、自分の好きなものは愛するが嫌いなものは愛さないという偏ったものです。天の神はそうではありません。だから、イエスは弟子たちに対して「天の父が完全なように、」あなたがたも愛という点において「完全でありなさい。」と教えられるのです。

つまり、この箇所を見るだけでも「神こそが基準である」ことが分かります。私たちが考えてしまいがちなことは、人間を大きく二つに分けて、一方がよい人間、もう一方が悪い人間、あるいは、私たち人間の平均をとって、半分がよい人間でもう半分が悪い人間としてしまうことです。でも、天においては神こそが基準であるから神を模範としなさいと言います。その神の基準によって私たちはさばかれると言います。ですから、ヤコブ2:10にはこのように記されています。「律法全体を守っても、一つの点でつまずくなら、その人はすべてを犯した者となったのです。」と。マタイの箇所と同じように、真の神は私たちに完全を要求しておられるということを証明するみことばです。

ですから、みことばが教えるように、私たち人間は行ないによってはだれ一人救われることはできないのです。なぜなら、神の前にはだれ一人完全である人間は存在しないからです。残念ながら、本来、私たちは神によってさばかれなければならない罪人なのです。というのは、私たちはこれまで何度も「これは悪いことだ、間違っている、決して良いことではない、正しいことではない」と分かっているが、悪の道を選択して罪に罪を重ね続けて来たからです。本来なら、私たちは聖い神によって救われるような、天に上げられるような者ではありません。でも、愛と恵みに満ちた神は私たちのために救いを用意してくださいました。それが三つ目のポイントになります。

Ⅲ. 救われるための方法とは？ 27-31節

「:27 彼は言った。『父よ。ではお願いします。ラザロを私の父の家に送ってください。』

:28 私には兄弟が五人ありますが、彼らまでこんな苦しみのある場所に来ることのないように、よく言い聞かせてください。』

:29 しかしアブラハムは言った。『彼らには、モーセと預言者がいます。その言うことを聞くべきです。』

:30 彼は言った。『いいえ、父アブラハム。もし、だれかが死んだ者の中から彼らのところに行ってやったら、彼らは悔い改めるに違いありません。』

:31 アブラハムは彼に言った。『もしモーセと預言者との教えに耳を傾けないのなら、たといだれかが死人の中から生き返っても、彼らは聞き入れはしない。』』

ここからも分かるように、金持ちが行った「ハデス」という苦しみのある場所と、「アブラハムのふところ」と呼ばれるところには間に大きな淵があって、互いに行ったり来たりすることはできない、つまり、一度そこに入ってしまうと、もう二度と救われる道はないということが分かります。だから、私たちは今のうちに、生かされている今のうちに救われなければいけないのです。今しかチャンスはないのです。では、いったいどうすれば私たちは救われて、苦しみのある場所ではなく、天に行くことができるのでしょうか？当然、イエスはそのことについてもちゃんと教えてくださっています。

1) 悔い改める

まず、これまで犯して来た罪を悔い改めることです。そのことが30節に書かれています。ここで金持ちは自分には救われる可能性がないと悟った後で、では、せめて自分の兄弟たちが救われるようにと願って「ラザロを私の兄弟のもとに送ってください。」と言います。「もし、だれかが死んだ者の中から彼らのところに行ったら、彼らは悔い改めるに違いありません。」と。この「悔い改める」ということばは「生き方を変える」という意味です。このことばの元の意味は「方向転換」をイメージするもので、少し位の変化、軌道修正ではありません。自分のそれまでの人生を深く反省して、自分中心の生き方であった人生ではなく、全くの正反対である真の神を見上げて、神に喜ばれるように生きていく生き方というのです。この金持ちは自分がさばきに下って、ようやくそのことに気付かされました。彼はこのときになって初めて、自分には造り主なる神がおられて、その方は自分にたくさんの恵みを与えてくださっていた、それゆえに、自分は神に対して責任があったのだ、神が喜んでくださるように生きていかなければいけなかったと、死んだ後になって知ることができたのです。

本当の神は今も私たちに多くの恵みを与えてくださっています。私たちにいのちを与え、ここまで健康を支え、私たちの本当の必要をすべて満たし続けてくださっています。いったい、なぜ、神はそのようなことをしてくださっているのでしょうか？当然、それには目的があります。そのことを聖書のみことばはこのように教えています。イザヤ43:7「わたしの名で呼ばれるすべての者は、わたしの栄光のために、わたしがこれを創造し、これを形造り、これを造った。」と。神は言われます。「すべてはわたしの栄光のために造った」と。私も皆さんも実は神の栄光のために造られ、今も神のすばらしさを現わすために生かされているのです。いかがでしょうか？果たして、皆さんはこれまで神のすばらしさを現わして来られたでしょうか？皆さんのこれまでの歩みや皆さんが口にされたことば、皆さんの心の中の考えに至るまで、皆さんは造り主なる神のすばらしさを現わして来られたでしょうか？

聖書はこのように教えます。ローマ3:10-12「:10 それは、次のように書いてあるとおりです。「義人はいない。ひとりもない。:11 悟りのある人はいない。神を求める人はいない。:12 すべての人が迷い出て、みな、ともに無益な者となった。善を行う人はいない。ひとりもない。」と。残念ながら、すべてをご存じの神は私たち人間がみな、いかに弱くいかに罪深い者であるかをよく知っておられます。私たち人間はどれ程頑張ってもこの聖い神から、また、すべてをご存じの神から認められるような良い人間になって救われることなど絶対にできません。だから、すべての人間にはこの悔い改めが必要なのです。

このみことばだけではありません。Ⅱコリント7:10でもこのように教えています。「神のみこころに添った悲しみは、悔いのない、救いに至る悔い改めを生じさせますが、世の悲しみは死をもたらします。」と。つまり、私たちの救いのために必要なのは悔い改めであると教えられているのです。皆さん、考えてみてください。多くのキリスト教会では私たち人間が罪のさばきから救われるために必要なのは信仰だけだと言われます。たとえば、ローマ3:28には「人が義と認められるのは、律法の行いによるのではなく、信仰によるというのが、私たちの考えです。」とはっきりと書かれています。また、エペソ2:8にも「あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。」と教えられています。では、どちらなのでしょう？救いに必要なのは「悔い改め」でしょうか？それとも「信仰」なのでしょう？そのことに関しては、皆さんはもう何度も学んでおられることと思います。

私たちが救われるためには「悔い改め」も「信仰」もその両方が必要なのです。では、どうして聖書の中のある箇所では「救われるために必要なのは信仰だけである」と教えていたり、あるいは、「悔い改め」だけが語られている箇所があるのでしょうか？残念ながら、私たちがそのように勘違いしてしまう

のは、私たちが本物の信仰や本当の悔い改めについて十分に理解ができていないからと言うほかありません。もしも、皆さんがこの聖書が教えている正しい信仰についての理解を持つなら、悔い改めが伴わない信仰は有り得ないということに気付くはずです。同じように、真の信仰に行き着かない悔い改めも存在しません。なぜなら、先ほど見た「悔い改め」ということばの意味を思い出してください。「悔い改める」ということばは「自分の心をすっかり変える、人生における考え方の根本をすっかり変える、自分の心を180度方向転換する」という意味です。かつての私たちはみな、造り主である真の神から離れ、神に逆らって生きていました。でも、そこから180度心を入れ替えるとどうなりますか？元の神の許に戻ろうとするのです。立ち返るのです。それこそが本物の信仰であり、本当の悔い改めです。ですから、もしも、皆さんの中に「私はイエス・キリストは信じているが悔い改めていない」とか、また、「私は心の奥底から悔い改めはしたが、まだ、イエス様を信じるころまでは至っていない」と言われる方がいるなら、残念ながら、それはまだ「信仰」や「悔い改め」が不十分であるゆえに起こってしまっていると言うほかありません。聖書のみことばは悔い改めのない本物の信仰は教えていないし、同様に、信仰に行き着かない本物の悔い改めも教えていません。どうぞ、そのことを重く受け止めていただきたいと思います。

2) 救い主であるイエス・キリストを信じる

今日見ている箇所、さばきに下ってしまった金持ちは「だれかが死人の中からよみがえって、死後にはこんなさばきがある、こんな苦しみがあると伝えるべきだ」と申し出ます。確かに、この申し出は分からないでもありません。でも、本当にそのことができたとして、それで多くの者たちが悔い改めるのでしょうか？私はそのようなことはないと思います。世界でも多くの人たちが言います。「私は以前死にかけて三途の川の手前まで行った。」、いわゆる臨死体験というものです。でも、興味深いことに、そのような体験者が言うことはてんでバラバラでどれを信じたらいいのか分かりません。ある人は死んだらそこには三途の川があると云います。また、別の人はそこにはきれいなお花畑が広がっていると言います。ある人は雲の上に行ったと言います。天使が来て私の手を引っ張っていつてくれたとも言います。また、私たちは死んだらもう一度別の生き物に、別の人間に生まれ変わるといふ教えもあります。

いったい、どの教えが本当でどれが真実なのでしょう？私たちは何を信じたらいいのでしょうか？そのことについて、今日見ているみことばは明確な答えを与えてくれています。16:27をご覧ください。ここは苦しみの場所に下ってしまった金持ちは自分は今もう救われないと悟って、ラザロをぜひ自分の家に送ってほしいと願っているところです。一度死んで苦しみの場所を目にした者が言うことばなら多くの者が信じるはずだと、彼はそのように思ったのでしょうか。まさに、「百聞は一見にしかず」ですが、それは本当に効果的なことでしょうか？

話が逸れるかもしれませんが、実は、私がある八田西キリスト教会で以前こんなことがありました。ある教会員の方の家族の葬儀をするに当たって、亡くなった方の家族が「この人は信仰を否定して死んでしまったゆえに、今、彼は地獄に下ってこの金持ちのように苦しんでいる、そのことを葬儀の場で話してください。聖書のルカ16章から語ってください。」と言われるのです。実は、私にそのことを願った方は八田西とは違う教会に通っておられる非常に熱心なクリスチャンです。皆さんはこの方のリクエストをどう思われますか？正直、私は家族の方からこのような希望を聞いて悩みました。というのは、できるだけその家族の方の希望に添いたかったからです。でも、それが最善かどうかは別のことです。そのとき私はいろいろ考えた結果、家族の方の強い希望にも関わらず、このルカ16章からはメッセージをしませんでした。私が思ったことは、亡くなった方が今地獄で苦しんでいるというメッセージは、この箇所では金持ちが願っているように、ラザロを遣わしてください、本当に地獄があるのです、という願いと共通していると思いました。確かに、この金持ちのように、苦しみの場所に下ってしまった者たちは、残された家族が救われることを願っていることでしょうか。でも、そのために、死んだ者が生き返って「こんなさばきがある」と警告をすることが最善でしょうか？

この箇所に見るアブラハムの返答に注目してください。このように教えています。29節「しかしアブラハムは言った、『彼らには、モーセと預言者がいます。その言うことを聞くべきです。』」と。「モーセと預言者」とは、この当時の聖書、今の旧約聖書に当たりますが、それを指しています。つまり、アブラハムが言ったことは「いや、聖書があるでしょう」です。31節も同じことです。「アブラハムは彼に言った、『もしモーセと預言者との教えに耳を傾けないのなら、たといだれかが死人の中から生き返っても、彼らは聞き入れはしない。』」。アブラハムは聖書のみことばこそが一番である、いや、聖書のみことばだけで十分だと教えているのです。

皆さん、考えてみてください。この世の中でいったい何人の方たちが「死後の世界がある、地獄がある」ということを、それが合っているかどうかは別にして、警告しているのでしょうか？果たして、このときに金持ちが、あるいは、ラザロがよみがえって死後にある苦しみの場所のことを伝えたとしても、

それで多くの者たちが罪を悔い改めて救われるのでしょうか？私はそうは思えません。というのは、「私は死後の世界を知っている」と言う者たちは数限りなくいるからです。それに、地獄に行きたくないから、いや、信じた方が得をするから信じますという信仰は、果たして、聖書が教えている本当の悔い改めてしょうか？その人は生ける真の神に立ち返って、新しい人生を神とともに歩もうとしているのでしょうか？残念ながら、私はそうは思えません。私たちが為すべきことは、今日のみことばが教えているように、ただ神のみことばを忠実に語っていくこと、伝えていくことではないでしょうか？

実は、私がこの浜寺の教会から今の八田西キリスト教会に遣わされてから、それまで私が関係をもっていた方々と違った別の教会の方々と触れ合う機会もありました。そこで改めて感じさせられたことは、教会と名の付く場所であっても、そこが本当に神のみことばを一番においているか、重んじているか、みことばだけを熱心に伝えようとしているかどうかということとは、必ずしも一致しないということです。教会であってもみことばを真剣に一番に教えようとしなくて、もしかすると、みことば以上に、説教者の考えや経験が礼拝の場で語られる教会が少なからずあることは事実です。私たちはそうではない聖書のみことばを重んじる教会に導かれたことを本当に感謝しなければいけないと思います。

皆さん、この聖書のみことば以上のすごい奇蹟がありますか？私たちはこの聖書のみことばを説き明かす以上に、だれか死んだ人を生き返らせてもらってその人に語ってもらいましょう！などとする必要があるのでしょうか？もしも、皆さんが真剣にこの聖書のみことばを調べてくださったなら、聖書の存在が、聖書のもっている特徴が、そして、何より聖書の教えているメッセージがどれ程偉大なものであるかということが分かるはずですよ。聖書以上のもの、聖書に並ぶようなものが果たしてあるのでしょうか？もしかすると、死後の世界のことを教えてくれる預言者、宗教家たちはたくさんいるかもしれません。しかし、聖書のような存在は他に見つけることはできません。

残念ながら、今日見た金持ちは家族の救いを願いながらも、もう一度、救いについて語る機会は与えられませんでした。でも、私たちはそうではありません。何度も何度も、生かされている限り、救いについて語っていくことができるのです。聖書が教えている救いのメッセージは、単なる教訓やいいかげんな神話の類ではありません。確実に、私たちひとり一人が受けなければならない現実なのです。私たちが苦しみのもとに下ってしまってから、そこで悔い改めても、どれ程後悔しても、それは「後の祭り」です。死んでしまってから本当のことを知っても遅いのです。私たちが神が与えようとしておられる救いを自分のものとして、たった一度しかない自分の人生を価値あるものとして、残りの人生を平安と祝福に満ちたものにしていくために、まずは、あなたが自分の罪を悔い改めて、神が遣わしてくださった真の救い主であられるイエス・キリストを信じ受け入れる以外に方法はありません。

どうぞ、この中にまだイエス・キリストを真の神、そして、あなたの救い主として信じ受け入れていない方がおられるなら、一日も早く信じ受け入れていただきたいと思います。そして、クリスチャンの皆さん、神から託された救いのメッセージをあなたのことばだけでなく、行ないをもって証をして、このすばらしい務めをこの一週間も、この一ヶ月も全うしていただきたいと思います。

《質問》

- Q 1. あなたは「死後の世界」が本当に存在すると思われませんか？
- Q 2. あなたは何を信じておられますか？それは本当に確かなものなのでしょうか？
- Q 3. あなたは、伝道には何が一番必要だと思われませんか？それはどうしてですか？